

教皇庁生命アカデミー会員第 23 回年次大会参加者との謁見、2017 年 10 月 5 日

Udienza al partecipanti alla XXIII Assemblea Generale dei Membri della

Pontificia Accademia per la Vita, 05.10.2017

[B0667]

本日午後 12 時、シノドス・ホールにて、教皇フランチェスコは 2017 年 10 月 5 日から 6 日までヴァチカンで開催中の教皇庁生命アカデミー会員の第 23 回年次大会参加者と謁見した。会期中、同アカデミーは「生命への同伴。科学技術時代における新たな責任〔*Accompagnare la vita. Nuove responsabilità nell'era tecnologica*〕」をテーマとするワークショップを企画している。

会見中、教皇が出席者に向けた挨拶は以下のとおりである：

教皇の挨拶

猥下、
令名高き皆様

皆様の年次大会の機会に、皆様にお目にかかることができ嬉しく思います。そしてパリア猥下〔Mons. Paglia：生命アカデミー会長〕のご挨拶とご紹介に感謝致します。私は皆様が捧げる貢献、時の経過とともに益々その価値が明らかになる貢献 ― 科学的、人間学的、倫理的な知識の掘り下げにおける、また生命への奉仕、とりわけ人の生命と被造物、すなわち私たちの共通の家の管理〔*cura*〕における ― を有難く思います。

皆様のセッションのテーマ「生命への同伴。科学技術時代における新たな責任」は、骨の折れる〔*impegnativo*〕テーマであると同時に必要不可欠なテーマでもあります。それは、最近の生命科学技術の発展について、プラネタリー・ヒューマニズム〔*l'umanesimo planetario*：惑星的人道主義〕*にアプローチする〔*interpella*：助言を求める〕好機と臨界の錯綜〔*intreccio di opportunità e criticità*〕に直面します。生物科学技術の可能性は、昨日まで想像を絶していた諸々の生命操作を今日ではすでに可能にし、並外れた諸問題を提起しています。

それゆえ、この時代の挑戦の頂点にある人間学的総合〔ジンテーゼ〕〔*sintesi antropologica*〕を秩序的に成し遂げるために、科学技術分野におけるかかる社会の進化の諸々の効果に関する研究と比較を強化することが急務です。皆様の有能な専門的助言の領域は、かくして倫理的、社会的あるいは法的衝突の個別特殊的状況によって提起された諸問題の解決に限定することはできません。人格の尊厳

と一致したふるまいを導くインスピレーションは、生命、生命の意味、生命の価値に関する総合的アプローチにおいて、科学と技術の理論と実践に関係しています。私はまさにこのパースペクティブにおいて、今日、私の省察を皆様に提示したいと思います。

1. 人という被造物は、今日、その固有の歴史のある特別な通路〔pasaggio〕にあるように見えます。それは、人の生命の意味、その起源、そしてその運命についての、古くてつねに新しい問いと、ある未知の脈絡において交差する通路です。この通路の象徴的な特徴は、現実に対する人間の至高性〔sovranità〕— 一種としても、また個としても— に強迫観念に取り憑かれたかのように〔異常なまでに〕中心を置く、ある文化の急速な普及のうちに総括的に認識することができます。自己崇拜〔*egolatria*〕、すなわち最も高貴な愛の対象〔*gli affetti più cari*〕を含むあらゆるものを犠牲として祭壇に供えるような、真のそして固有の自己崇拜にまで言及する者があります。このパースペクティブは無害ではありません：それは、持続的に他者や世界に目を向けることができなくなるまで鏡を見つめる主体を造形します。この態度の普及は、すべての愛情と生命に関わるものに対して極めて重大な帰結を導きます（cfr. 回勅『ラウダート・シ（*Laudato si'*）』48〔2015〕）。

もちろん、ここでの問題は、個人の渴望— QOLと、それを助ける経済資源と技術的手段の重要性への— の正当性を否定し、または縮減することではありません。しかしながら、経済と技術の同盟〔*alleanza*〕を特徴づける、また権力と利益の働きにおいて生命を搾取すべき、あるいは廃棄すべき資源として扱う、無遠慮な物質主義を沈黙して看過することはできません。

あいにく、世界のどの地域の男女も子供も、悲嘆と苦痛とともに、この科学技術万能主義的物質主義〔*materialismo tecnocratico*〕の偽りの約束を経験しています。そしてまた市場の拡大とともに無意識的・機械的に拡散する繁栄・安寧〔*benessere*〕のプロパガンダとの矛盾において、かえって貧困と衝突、〔不用品の〕切り捨て〔*scarto*〕と廃棄、怨恨と失望の領域が広がっています。科学技術の真正の〔*autentico*〕進歩が、それに代わってより人間的な政策を生み出さなければなりません。

キリスト教の信仰は、ノスタルジーや苦情へのあらゆる譲歩を拒みつつ、再びイニシアティブを取るために前進します。しかも教会は、その時代における科学と良心への道を開く、寛大で啓発された知能の十分な伝統を持っています。世界は、真剣さと喜びをもって、創造的で建設的な、謙遜で勇氣ある、世代間の断絶〔*frattura tra le generazioni*〕の再建を断固として決意する信徒を必要としています。この断絶は生命の伝達を遮断します。青年時代には、熱狂させる諸々の可能性が人を高慢にします：しかし誰が彼らを成年時代の完成へと導くのでしょうか。将来の世代に対しても、過去の世代に対しても、責任と愛を果たしうる生が、成年の条件です。老年時代における父母の生は、寛大に生を捧げたことのゆえに名誉が帰せられることが期待されます。— もはやそれができないことのゆえに切り捨てられるのではなく

。

2. このイニシアティブを再開するインスピレーションの源泉は、再び、生命の起源とその運命を照らす神の言葉です。

創造と救済の神学 —それは、あらゆる生命への、そして生命全体〔tutto la vita〕への愛の言葉と行い〔理論と実践〕に転換することができます —は、今日、今私たちが住んでいる世界における教会の歩みに同伴するために、全く不可欠であるように思われます。回勅『ラウダート・シ』は、創世記第 1 章で私たちが与えられた啓示の偉大な物語から出発して、世界に対する神と人の眼差しを今またこうして再開することの宣言のようなものです。それは、私たちの誰もが、神自身によって望まれ愛されている被造物であることを語ります。私たちは、生命の進化の過程で精巧に組織され選択された、単なる細胞の集合体ではありません。そして創造の全体もまた、母、父、その子供の全世代に拡張される、人という被造物に対する神の特別な愛に内包されています〔inscritta〕。

あらゆる生命の尊厳の基礎にある、始源〔origine〕の神の祝福と永遠の運命〔destino eterno〕の約束は、全員のものであり、全員のためのものです。地上の男、女、子供たち —彼らが市民〔i popoli〕を構成します— が、その誰一人として排除することなく、神が愛し救いをもたらそうとする、地上の生命〔la vita del mondo〕です。

聖書の創造の物語は、つねに新たに読み直されます。 —男女の同盟に創造と歴史を委ねる神の愛の行為の広さと深さのすべてを評価するために。

この同盟は、もちろん、結婚と家族を通して生命を伝達する道の特徴づける、人格的かつ豊穡な〔feconda〕愛の一致によって封印されています。しかしそれはその封印〔sigillo〕を超えたところにまで赴きます。男女の同盟は、社会全体の演出・監督〔regia〕をその手に引き受けるよう要求されます。これは、世界に対する責任への招待です。—文化と政治における、労働と経済における、そしてまた教会における。

ここでの問題は、単に、機会均等や相互承認の問題のみにとどまりません。それは、とりわけ生命の意味についての、および市民の歩みについての、男女の相互一致〔intesa〕の問題です。男女はただ単に愛について話し合うよう要求されているのではなく、愛をもって、しなければならないことについて話し合うよう要求されているのです。なぜなら人の共同生活〔convivenza umana：人間社会〕は、あらゆる被造物に対する神の愛の光の中で実現するからです。話し合うこと、そして同盟を結ぶこと、なぜなら二人の内どちらも —男だけで、あるいは女だけで— この責任を引き受けることはできないからです。〔男女は〕一緒に、その祝福された相違において創造されました；一緒に、罪を犯しました。—神に取って代わろうとする慢心のゆえに；一緒に、キリストの恵みによって神のみ前に立ち帰りました。—神によって委ねられた世

界と歴史の管理〔cura〕を成し遂げるために。

3. 要するに、この時代の歴史の地平にあるのは、真の固有の文化の革命です。そして教会は、最初にそれに参与しなければなりません。

かかるパースペクティブにおいて、まず誠実に遅れと不足を認めることが大切です。女性の歴史を陰鬱に刻印した諸々の服従の形態は、決定的に放棄されます。新しい始まりが市民のエートス〔道徳精神〕に書き記されなければなりません。それが、革新されたアイデンティティと相違の文化をもたらすことができるのです。性の相違と、したがって男女の相互一致をラディカルに中性的なものにするような人格の尊厳への道を再び開く、最近進行している仮説は正しくありません。人の尊厳についての曲げることのできない価値を減弱させるような、性の相違に関する諸々の否定的解釈に反対する代わりに、人はかかる相違を事実上抹消しようとしています。一人格の発展にとって、また諸々の人間関係にとって、男女の性の相違を取るに足りないものとするような技術や実践を持ち出しつつ。しかし「中性〔neutro〕」のユートピアは、性的に異なる体質を持つ人の尊厳も、生命を産出し伝達する人格の質も、同時に撤去します。性の相違の生物学的・身体的操作 — 生物学技術は、自由な選択によって完全に自由に利用しうるものとしてそれを垣間見させます。しかし実際はそうではありません！ — は、かくして男女の同盟を養成し、それに創造と豊穡をもたらすエネルギーの源泉を除去する危険を持っています。

私たちのために、マリア — イエズスの母、神の母 — の胎内で、子〔イエズス〕を人にするによって啓示される、世界の創造と子の出生〔generazione del Figlio〕との間の神秘的な関係 — は、私たちに驚かせ、感動させるだけで終わるものではありません。この啓示は決定的に、存在の神秘と生命の意味を照らすものです。出生〔generazione〕のイメージは、ここから出発して、生命に関する深遠な希望を発します。賜物として受けたがゆえに、生命は賜物において誉め讃えられます。生命を産み出すことは私たちに蘇らせ、それを使うことは私たちに豊かにします。

あたかも女性を侮辱し集団の繁栄・安寧を脅かすものであるかのように、人の生命の出生〔generazione della vita umana〕に対して行使される威嚇がもたらす挑戦に、応じる必要があります。

男女の生命産出の同盟は、障壁のようなもの〔un handicap〕ではなく、男女の惑星的人道主義の要塞のようなもの〔un presidio〕です。私たちの歴史は、もし私たちがこの真理を拒否するなら、更新されないでしょう。

4. 生命への同伴と世話への情熱は、その個人的および社会的歴史の完全な弧〔軌道〕に沿って、その相違における人の産出と再生への同情と柔軟さ〔tenerezza〕のエートスの復権を要求します。

大事なことは、まず、生命の様々な時代〔年齢〕に対する感受性、とりわけ子供と老人の生命に対する感受性を回復することです。これらの生命は全くのところ、それ自体デリケートで壊れやすい、脆弱で腐敗しうるものですから、もっぱら医療と福祉のみに関わる問題ではありません。そこには人の靈魂〔anima〕と感受性〔sensibilità〕の諸々の部分がかかわっており、各個人と同様コミュニティからも耳を傾けられ、承認され、保護され、尊敬される必要があります。これらが全くただ単に売買され、官僚的に統制され、技術的に整備されうるのみの社会は、すでに生命の意味を喪失した社会です。〔その社会は〕幼い子供たちにそれ〔生命の意味〕を伝えないし、年老いた両親のうちにそれを認めないでしょう。これが、私たちがほとんど了解することなく、今やドアも窓もない壁とともに、ますます子供たちに敵対する都市と、ますます老人たちに無愛想なコミュニティを築いている理由です：壁は私たちを防御しなければならないのかもしれませんが、実際には私たちを息苦しくさせています。

あらゆる正義を精錬し完成する、神の慈悲への信仰を証明することは、様々な世代間で真の同情を循環させるための不可欠の条件です。これなしに、世俗的な都市の文化は、人道主義の感覚麻痺と失墜に抵抗するいかなる可能性も持つことはできません。

この新たな地平のうちに、刷新された生命アカデミーの使命が示されていると思います。困難ですが、エキサイティングな使命であると推察します。宗教に関して様々な傾向を持つ、また世界の様々な人間学のおよび倫理的ヴィジョンを持つ、共通善を考慮して市民の注意をより真正な〔autentica〕智恵に再び連れ戻す必要性を共有する研究者と善意の男女に不足はないことを確信しています。開かれた実りある対話は、人の生命を価値づける確実な論拠〔ragioni valide〕の探索に意を用いる多くの人々とともに始められることが可能であり、またそうしなければなりません。

教皇と全教会は、皆様が果たそうとしている責任に感謝します。受胎からその自然の最後までの人々の生命に責任をもって同伴することは、自由で情熱的な男女による、また営利を目的としない司牧者による、識別と愛の知性の働き〔lavoro di discernimento e intelligenza d'amore〕です。皆様がなす科学と良心によって、彼らを支えようとする皆様の意図を神が祝福されますように。ありがとう。私のために祈ることを忘れないで下さい。

・傍点は原文ではイタリックの箇所。〔 〕内は訳者による。

traduttore : Etsuko Akiba〔秋葉 悦子・訳〕

*【nota del traduttore : 訳注】

planetario (〔英〕planetary) は、「惑星の、惑星のような」の他に「地球の、この世の、世界的な」の意味もあるが、教皇は一般的に用いられる globale (〔英〕global) ではなく planetario の語を用いているので、本文の訳語を用いた。

umanesimo planetario の提唱者は、フランスの哲学者エドガル・モラン (Edgar Morin, 1921-) であると思われる (その簡潔な紹介として、Armando Massarenti, *Per un umanesimo planetario*, Il Sole 24 ore, 10 Settembre 2015〔15 aprile 2012 に掲載された記事の再録〕; Mauro Ceruti e Edgar Morin, *Un nuovo umanesimo ci salverà*, Il Sole 24 ore, 9 Settembre 2012, etc. がある) が、本文中でも引用されている回勅『ラウダート・シ』 (*Laudato si'* http://w2.vatican.va/content/francesco/it/encyclicals/documents/papa-francesco_20150524_enciclica-laudato-si.html; 邦語訳として、『教皇フランシスコ・回勅ラウダート・シーとともに暮らす家を大切に』(瀬本正之 = 吉川まみ・訳) カトリック中央協議会、2016 年) においても第 5 章のタイトルとして Inequità Planetaria の表現が用いられている他、pianeta の語が散見される (14, 16, 18, 38, 160, etc.)。同回勅の公表後間もなく国連総会で全会一致で採択された『持続可能な開発目標 (SDGs, Sustainable Development Goals) アジェンダ 2013』(2015 年 9 月) を追い風に、最近では planetary health のような表現も現れている (Panorama Perspectives: Conversations on Planetary Health, panoramaglobal.org/planetary-health, The Rockefeller Foundation - Lancet Commission)。

イギリス人ジャーナリスト、Austen Ivereigh の近著 *The Great Reformer. Francis and the Making of a Radical Pope*, Picador/Henry Holt: New York, 2015 (邦語版として、宮崎修二・訳『教皇フランシスコ・キリストとともに燃えて一偉大なる改革者の人と思想』(2016 年、明石書房、445 頁) には次のような記述が見られる。「ベルゴリオは二種類の『弱い思想』にある危うさを見ていた。ひとつは個々のアイデンティティを打破するグローバリゼーションの帝国主義的変形であった (「真の」グローバリゼーションの正しいイメージは球体ではなく多面体であると彼は考えている。そこでは、それぞれの文化は自身のアイデンティティを維持しながら、共通の利益において結びつく)」。

globalization の語は、日本でも、ときとして Americanization と同義語で使用される傾向が見られる。他方、planetario は太陽の周囲を廻る惑星の運動を想起させる語でもある。リーダーズ英和辞典には「〔電子が〕原子核の周囲を回る」の意味も記されている。教皇はこの語によって、太陽あるいは原子核が暗喩する神の存在を示唆することまで含意しているようにも思われる。